



日弁連野球決勝大会 (2014.10.25-26 @岩手県営野球場) 東京ローヤーズが2連覇達成!!

会員 安田 伸一 (56期)

東京弁護士野球クラブの概要

(メンバー、雰囲気、練習・試合の状況・入部方法など)

東京弁護士野球クラブ（通称：東京ローヤーズ）は、期・野球歴にかかわらず、東京三会の弁護士であれば誰でも入部は可能。現在、部員は60名ほど、女子マネージャー1名。雰囲気は、野球以外では和気藹々、野球では勝ちにこだわり、ダメなプレーにはお互い厳しく指摘し合い切磋琢磨している（罵り合いではない）。入部は安田（TEL 03-6261-2401）まで連絡いただければ随時参加可能であるし、毎年、東弁の新入会員歓迎会ではブースを設けて案内している。

3月から11月までの毎週末、練習ないし練習試合を行っており、公式戦として、裁判所・検察庁との法曹野球（年2回）、税理士会・会計士会との三会对抗（年1回）をはじめ、他の弁護士会チームとの対抗戦（三都対抗戦、関越大会）があるが、毎年秋に開催される日弁連野球の決勝大会（地方予選を勝ち抜いた8チームで争われる）制覇を最大の目標として活動している（年間の総試合数は40程度）。

試合結果レポート

〈1回戦〉

1回戦は強豪横浜との対戦。中村博監督のコメントのとおり（53頁）、2年間勝てていない苦手な相手であったが、エース千葉投手（会員59期）が横浜打線を封じ、完封勝利を収める。

	1	2	3	4	5	6	7	計
東京	0	0	3	0	0	0	0	3
横浜	0	0	0	0	0	0	0	0

〈準決勝〉

準決勝は大阪戦。2014年夏の対抗戦で敗れている相手だが、序盤に大阪のミスと野尻選手（一弁62期）のタイムリーで得たリードを、倉持投手（一弁51期）、村松投手（二弁65期）のリレーで守り切る（時間制限により6回で終了）。

	1	2	3	4	5	6	7	計
大阪	0	0	0	0	3	0	—	3
東京	0	4	0	0	0	0	—	4

〈決勝〉

決勝は、これまた2014年夏の対抗戦で敗れている名古屋。先制するもミスで追いつかれ、さらに勝ち越しを許す苦しい展開ながら、先発の近石投手（会員64期）が立ち直り、打線がようやく相手投手をとらえ、最終回の浅妻選手（一弁49期）の一打で逆転勝利を収めた。

	1	2	3	4	5	6	7	計
東京	1	0	0	0	1	0	3	5
名古屋	1	0	2	0	0	0	0	3

祝勝集会のレポート

盛岡市内の冷麺で有名な焼肉店で祝勝会が開かれた。2014年の序盤は勝てず重々しい雰囲気が漂った時期もあったが、それが嘘のように皆晴れやかな気持ちで、美味しいお酒と焼肉と冷麺を味わい、大いに野球の楽しさを語り合ったのであった（焼肉店でも帰りの新幹線でも、店員及び車掌から、それぞれ「他のお客様もいらっしゃいますので」と怒られたことは言うまでもない）。



MVPを受賞した浅妻選手のコメント

たまたまチャンスに打順が回ってきた私が運良く賞をいただくことができましたが、本当にチーム全員で勝ち取った優勝だと思います。1回戦で横浜打線を完封した千葉投手、準決勝で2点タイムリーを放った野尻選手、ブルペンで何百球も投げながらスタンバイして準決勝と決勝で好リリーフをした村松投手は、いずれも MVP 級の活躍だったと思いますし、決勝の最終回1点ビハインドの状況下で南東選手（二弁62期）がファールで粘りながら選んだ四球、その後一二塁間に技ありのヒットでつないだ石井選手（千葉県弁護士会46期）の打撃は、決勝での逆転劇を語る上で欠かすことのできない秀逸のプレイだったと思います。実に楽しく、充実した3試合でした。ベンチの雰囲気も最高でした。素晴らしい大会を設営いただいた岩手弁護士会の会員の方々、どうもありがとうございました。日弁連野球ばんざい！



試合終了後、整列する選手たち



閉会式後



中村博監督(会員47期)のコメント

正直、2連覇を達成できてほっとしております。2014年1月の監督就任時に、「『ベテラン・中堅・若手』の力を集結した全員野球」をスローガンとして掲げましたが、最終的にそれが実現できたからこそその優勝だったと思います。横浜とはここ2年間練習試合も含め勝てていない、大阪・名古屋とは、2014年7月の三都対抗戦でいずれにも敗北しているというプレッシャーの中での戦いで、すべての試合がそのスコア経過からも明らかなおり緊張の連続でした。このような中で、3試合を勝ち抜くことができたのは、ここぞという時の集中力と勝利に対するどん欲さ

が、他のチームより勝っていたからだと思います。決勝戦終了直後に、チームの皆様に胴上げをしてもらい感無量でしたが、このような機会を経験させていただいた選手・チーム関係者に心より御礼を申し上げます。1999年度～2008年度にかけての栄光の10連覇の再来を目標に、今後さらなる精進をして、「強い東京」にすべくチーム力の向上に努めています。



胴上げされる中村監督



日弁連野球大会を取材して

LIBRA 副編集長 難波 知子 (61期)

2014年10月25日、臼井一廣LIBRA編集長とともに岩手県盛岡市の岩手県営野球場へ行き、日弁連野球決勝大会を観戦した。

東京チームの試合は11時から、対戦相手は横浜で、私たち取材陣もベンチの中に入れていただいた。野球は全くの素人で、全くイメージが湧かないままベンチに入ったが、一番驚いたことは試合中メンバー全員がとても大きな声を出し、声を掛け合っていることであった。ベンチの中では皆とても真剣な様子で、知り合いの会員にすら気軽に声を掛けられなかった。

観戦した試合は東京チームが勝った(試合経過については野球部記事参照)。

ベンチの中で今回の大会パンフレットも見せてもらったが、各メンバーの「寸評」は、野球を知らなくても、その人について知らなくても、とても面白いので是非ご覧いただきたい。

試合後、日弁連野球連盟の吉川正也会長(札幌弁護士会)にお話を伺った。

会長のお話によると、若手がどんどん増えてきて、レベルも年々上がっていているということであった。昔はほとんどいなかった六大学野球経験者や、甲子園経験者も増えてきて、以前とはレベルが大きく異なるということであった。これも司法制度改革の予想外の効果の一つのようであった。将来は単位会ごとにひとチーム作り、さらに活性化させていきたいということであった。東京、大阪、名古屋のような大都市のチームが規模も大きく強いということなので、今後は、小さな単位会でも野球部会員が増え、高校野球のように全都道府県から出場し、試合を重ねていくことができるようになればよいと思った。

その後、19時から市内のホテル東日本で懇親会が行われた。この懇親会で次の日の試合の組み合わせを決めるということだったが、抽選が行われるかと思っていたら、わんこそば大会の結果によって決めるということだった。これは大変おもしろく、盛り上がった。郷土料理やゲームなど運営側の岩手弁護士会のチームも皆を楽しませるための工夫が素晴らしかった。業務とは別に、これだけ企画、準備していくことは大変だっただろう。

様々な世代の弁護士が一丸となり一生懸命戦う試合を観戦させていただき、また、色々な方々から新鮮な話をお伺いでき、大変充実した一日となった。皆さん、ありがとうございました。